

旧制中学校における校風と運動部活動

—長野県諏訪中学校における「運動部一般化」運動—

基礎教育学コース 堤 ひろゆき

School spirit and sports club activity

—“Generalization movement” in Suwa old-system junior high school in Nagano Prefecture—

Hiroyuki TSUTSUMI

The purpose of this study is to clarify the impact that the practice of sport in an old-system junior high school had on both students and the school through an analysis of the school's alumni association magazines published from the 1900s to the 1930s, a period in which the alumni association went through major reform. The paper clarifies the relationship between sports and spirituality within the school and the way in which this relationship was formed. It shows that the way in which spiritual issues were discussed in the magazine differed according to whether they related to matters solely internal or also external to the school. It also shows that reform resulted in all students being forced to take part in sports. Spirituality relating to sport was supported by different logic depending on whether the subject was solely internal or also external to the school, but was linked together as a result of reform, and students' spirituality began to be measured by the marks they achieved in sport.

1. はじめに
2. 対象
3. 「運動部一般化」運動以前の運動部活動
4. 「運動部一般化」の経緯
5. 「運動部一般化」以降
 - A. 選手廃止後の競技会参加者
 - B. 生徒に求められた「精神」と発露としての運動
6. おわりに

1. はじめに

本稿の目的は、1900年代から1930年代にかけての長野県の旧制諏訪中学校学友会発行『学友会誌』を手掛かりにして、旧制中学校での学校文化形成にスポーツが果たした役割を明らかにすることである。佐藤秀夫によると、「学校には、教育一般に比してより明確に、その社会・文化の固有性が刻印されている」¹だけでなく、「その活動にはすぐれて日常性・慣習性を帯びて」²いる。その上で佐藤は「学校文化の意味をみすえた「事実史」」³の必要性を説き、「教育「事実史」を、学校文化の考現学あるいは学校での教育慣行史」⁴として、研究上の重要性を指摘した。

そのような学校文化を、当時発行されていた『校友

会雑誌』では、しばしば「校風」として表現している。当時の生徒たちはこの「校風」という言葉を、特に運動部活動に関わる場面で用いていた。そこで本稿では、運動部活動と校風文化形成との関係に焦点を当ててみたいと考えている。運動部活動では選手を設定し、特定の生徒が選手として競技会に出ることで学校の名誉を獲得していた。学校の名誉と校風は密接なかわりを持ち、校風文化形成に運動部活動の果たした役割が大きいことに注目したい。

本稿の対象である旧制諏訪中学校において特筆すべきは、学友会において「運動部一般化」という改革があったという事実である。この「運動部一般化」は、運動部の選手を廃止して全生徒に運動を強制するという改革であった。「運動部一般化」は、単純に運動の機会の拡大や均等化を推し進めただけではない。この改革によって、全生徒における運動の目的が、校風の発揚や競技での勝利ともつながることになった。「運動部一般化」は、教員や学校当局から強制されたものではない。むしろそれは、「自治」を掲げた生徒の手によってなされた。その生徒自身も、校風を規範として運動部改革を実行し、運動部活動によってその校風を内面化していったといえる。諏訪中学校において運動のもつ意味を一変させたといえる「運動部一般化」

を転換点として校風の扱われ方を見ることで、学校文化においてスポーツが果たした役割に接近したい。

「運動部一般化」の背景に関する先行研究としては、中村哲也「近代日本の中高等教育と学生野球の自治」(2009)がある。1900年以降の中学校設置数増加の中で、スポーツの部活動では対校試合の機会が増加した。その結果、大正期ごろまでにはスポーツを通して勝利至上主義ともいえる観念が生徒たちに共通して定着していくことになった。中村は、野球をとりまく経済的要因や環境、当時の野球界の著名人らの野球論に焦点をあてることによって、野球の導入期から戦後にかけての日本における学生野球のもつ特質を剔抉した。メディアによる全国中等学校大会などの大規模な競技会によって形成される企業、OB会、各学校の野球部の経済的関係を指摘し、野球を通しての進学や就職ルートの形成と、そのための競技会の過熱を示した。過熱する野球部では選手の争奪戦が過激化し、選手も含めた関係者は勝利を至上として活動するにいたった。こうした背景や学生野球の入場料収入の増加が選手制度廃止運動の要因として挙げられている⁵。野球部をとりまく環境の変化が、旧制中学校内部における校友会の制度に変革をもたらしたことが明らかにされた。中村の論考では、変革の外在的な要因の検討に重きがおかれており、結果的に校友会の制度変化の内在的側面については十分な検討がなされているとは言い難い。そこで本稿では、旧制中学校における学校文化とスポーツの関係を、勝利至上主義とは別の内在的要因があるとの仮説から読み解きたい。

2. 対象

本稿が対象とするのは、長野県立諏訪中学校の1900年代から1930年代にかけての校友会運動部活動である。1894(明治27)年に、文部省は「尋常中学校ノ学科及其程度」を改正し、尋常中学校に、実業に就く者向けに「実科」の課程を設けられるとした。翌1895(明治28)年、諏訪郡の通常郡会で中学予備校の運営費が認められる。郡では、「中学予備校」よりも充実した正規の中学教育の実現を願望していたため、実科中学校の創立を県に申請することになった。同年4月、文部大臣は実科中学校設立を許可。「諏訪実科中学校」が開校した。1900(明治33)年1月には、「諏訪実科中学校」は実科の冠称を取って普通の「郡立諏訪中学校」となった。この頃、諏訪郡は県に、松本、長野、飯田、上田の4中学校に倣って「郡立諏訪中学校」も

県立中学校として充実させてほしいと願い出て、1901(明治34)年2月に、県立に移行した。同年6月に正式名称は「県立長野県諏訪中学校」となった。

諏訪中学校校友会は実科中学校時代からの『学友会誌』から番号を振りなおして活版印刷の『学友会誌』を発行していた。『学友会誌』は、一般的には『校友会雑誌』と呼ばれる雑誌である。『校友会雑誌』とは、旧制の中等以上の学校に設置された組織である校友会が発行していた雑誌である。校友会は、学校制度上の規定はないものの、学校長を会長とし、現旧教職員と生徒および卒業生によって構成されていた。校友会は、多くの校内行事の運営に留まらず、『校友会雑誌』の編集・発行業務や卒業生との連絡の機能も備えていた。『校友会雑誌』の内容は校友会によってさまざまであるが、主に論説、詩歌、創作、各部報告、通信などの欄から成り立っていた。執筆者も多様であるが、基本的に読者は校友会会員が想定されていた。

学友会としての運動部は学友会での行事を行う際の運営を担うことだけが定められていた。生徒の所属についての規定は特にない。

第三條 本会には左の六部を置く

談論部 野球部 擊劍部 端艇部 庭球部

第四條 談論部は一年内一月、三月、四月、七月、九月、十二月、に於て年に六回定期会を開く、野球擊劍庭球弓術の各部は五月十月に。端艇部は六月拾月に於て定期大会を開く⁶

諏訪中学校校友会では、昭和の始め頃に、運動部の選手制度を廃止して全生徒が運動に参加する制度に変更する動きがあった。これは、「運動部一般化」運動と呼ばれている。この運動をスポーツ文化形成における一画期とし、諏訪中学校の運動部を「運動部一般化」の以前と以降の二つの時期に区分して論じる。なお、「運動部一般化」以前の特定の生徒が選手として対外試合に出場する制度を、「代表選手制度」とし、以降の全生徒が運動部に関わった上で試合にも出場する制度を「一般化制度」とする。

3. 「運動部一般化」運動以前の運動部活動

本章では、代表選手制の時期での運動と校風の関わりを、スポーツにおける選手への言説に基づいて明らかにする。選手に求められていたのは学校の名誉を対外試合において誇示することであり、またそうした選

手に対する批判も存在していた。選手の役割と生徒の関与の仕方に注目する。

まず、1907（明治40）年ごろまでに、他中学校との交流について、勝ち負けに意識が集中し始めていた。特に選手同士による「対校戦」は、学校の名誉を左右するものとして扱われていたことが明らかである。そうした選手の役割に対して、第2号（明治37年12月）から既に、運動を行うこと自体とは別のもののために運動の価値が置かれていることを示す文章と、選手が競技にのみ特化し、過熱する事に対して非難する論説がある。

……諸氏は真の運動家に非るなり。諸氏は怠惰なり。無意力なり。而して驕慢放逸なり。無秩序無節制なり。悪風の伝染者なり。學術操行の劣等者なり。これ何の尊崇すべき所かあらん。諸氏は吾人が深く彼の偽善者を惡むとを知れりや。其は道德仁義とふ善名の下にかくれて、其がきたなき私欲と汚れたる虚栄心とを満たせばなり。糞土を錦繡に包みて、不当の代償を搾取すればなり。然り吾人は誰が目にも惡人と見らるべき拙劣なる露骨なる惡人よりも、この巧黠なる似非善人を惡むこと深し。故に亦彼の運動或は体育の美名の下にわが怠惰無氣力を隠蔽して、徒に其肩を怒らし、其言行を粗暴にして、所謂鬼面小兒を嚇し得て得々たる怪物を惡むこと、怠惰者無氣力者らしき無氣力者を惡むよりも甚だしからざるを得ざるなり。……⁷（下線部引用者。以下同）

ここでは、個人の「きたなき私欲と汚れたる虚栄心」を満たすために運動を行うことを非難している。特に批判的になっているのは、「道德仁義」のため、という名目である。「道德仁義」のために運動するのが問題なのではなく、そのような「善名」のために騙りながらそれに反した振る舞いをするのが問題視されている。「道德仁義」のために運動を行うこと自体が批判されているのではないことに留意したい。

……実に現今の運動法なる物は選手の爲めに特に設けし感なき能はず、特に選手その者に限って運動上至大の利便を与へ、他の人々をして運動せざるように余儀なくなさしむるにあらずや
あゝ選手何かある、彼らとても校友会々費は十五銭より多額におさめざるにあらずや、而して他会員よりより多くの特点を許与せらる、これよしや

其技の精巧なるにもせよ他会員を犠牲に供しても猶わが利を汲々乎たるはそも何故ぞや、
論者曰く「選手は一校の運動を代表して他校と輸贏を争ふ爲めに特に設けたるものなり、これが爲めに他会員よりより多き特点を与ふる所以なり」と、我こを耳にして其説く処の幼稚なるに一笑を禁じ得ざりき

云はずや選手は一校の運動を代表すと、一校の運動の微々として振はざるに、よしや選手は其技の衆に卓越して他校より一等を輸するとも、寸毫も価値なきなり、一校の運動の駸々乎として進歩し隆々乎として發揚して而る後始めて其を代表すべき選手の必要を生ずるにあらずや、

然るに選手のみ運動の得点を与へ練習して上達せしめ、他生徒等をして呆然拱手傍觀の止むなきに至らしむるなれば、縦令選手の技のいかに巧みなるも一校の運動を代表せしと揚言する能はざるなり⁸

選手のみが運動の施設を独占し、選手以外の生徒は運動することができないことに対する不満と、学校を代表しているというおごりが選手の間にあることが、運動競技に傾倒していく運動部に対しての批判として述べられている。

選手だけでなく「他の人々」も運動をするべきであるという主張は、なぜ登場したのであろうか。斉藤利彦によると、明治期における中学校では半途退学者が「当時（明治34年——引用者）の1学年分の生徒数を優に上回っていた」⁹。斉藤は半途退学者を「病氣」、「学力」、「資力」の3つの視点から分析している。特に「病氣」は体力的な問題を総称している。1904（明治37）年から1911（明治44）年までの8年間における全国の退学者中の死亡も含めた病氣による半途退学者は12%前後で推移している¹⁰。具体的な病名や死因を追いながら、斉藤は「中学生たちにとって病氣とは、事情によっては死に直結することはもとより、學業の継続そのものをもただちに危機に陥らせる、きわめて深刻な事態として存在していた」¹¹と指摘している。運動によって身体を鍛えることで健康な中学生を維持するという意識が生徒にも持たれていたのではないだろうか。

健康のためという一見わかりやすい目的があるにもかかわらず、このような非難が出るまでに学校を代表する選手が他校との競争を激化させる背景としては、中学校の急増が挙げられる。米田俊彦によれば、1893

(明治26)年から1903(明治36)年までの10年間で中学校への入学志願者数は4倍近くに、入学者数は3倍以上に増加している¹²。米田は、急激な増加の一般的背景として、政治的背景、経済的背景、内地雑居の影響の3点を主要なものとして挙げている。政治的には民党と政府との対立の解消によって地域利害の衝突と地域間の予算獲得競争の展開がおり、中学校の増設が道路や河川と同様に「産業基盤の育成」という意味合いで行われることになった。経済的には、農村経済の好転により富裕な中間階層が形成され、貧困階層と富裕な中間階層の利害対立を生んだ。富裕な中間階層による財政投資によって産業基盤の育成が行われることになり、その一環としての中学校は、貧困階層にとって手の届かない中間階層のためのものという性格を持ち、拡大した中学校への進学機会は中間階層のものであったと指摘している。最後に米田が挙げているのは、条約改正に伴う内地雑居の影響である。外国人から非文明的であるとみられないために、地域の文化水準向上を目的として中学校が施行されたとしている¹³。

米田の挙げた背景から、当時の中学校は地域の「文明的」文化の中心であり、その担い手である富裕な中間層の子弟が通う学校であったということができであろう。地域間で利害が衝突し、予算獲得においても競争が生じていることから、地域の文化の担い手である中学校が他地域の中学校と競争関係におかれたと考えることができる。特に、引用箇所ですべて「運動」、すなわち他校との競争を前提とするスポーツは、単純に個人の競争を超えて学校の代表者同士の、学校を担った競争の場となったといえるであろう。

明治末期になると、「対校試合」とそれに出場する選手は、愛校心や学校の自覚のために重要であるとされるようになる。『学友会誌』第11号(明治45年2月)に「運動部の不振は一校の士気に関するや切、吾々は一校の士気を代表せる選手諸君が愛校の情多々なるを知ると共に益精神的に肉体的に努力せる諸君の労を多とするものなり」¹⁴と述べられる箇所が見られる。また、同号に「対校と云ふ事が幾百の学生をして同時に自らの学校と云ふものを明らかに脳裡に描かしむることは疑なき事実である」¹⁵の一文も見られる。この時期から、「対校試合」において選手のみならず生徒の「熱誠」なる応援や責任といったものも強調され始めるようになる。「愛校の情」などのために、生徒は運動部とその選手への協力を求められることとなっていく。

ところがその後、「対校試合」とその〈名誉ある選手〉に対する風向きが変わってくる。

これ実に我が野球部員の献身的猛練習であつた。彼等は唯『諷中の為』日子労力を犠牲に供して少しも顧みなかつた。応援の少なきも嘆たなかつた。

暑中休暇も十日過ぎて八月四日となつた。此実に吾選手の晴れの舞台へ乗り出、其日である。が彼等の門出は到つて淋しい。一言として応援の歌を叫ぶ愛校家もない。唯大なる決心と元気が九選手のおもに見えたのみであつた。

……一般諸子の野球部に対して余冷淡なる事下級生野球部員等の殊に平常の練習に不忠実なりし事等にも起因す……¹⁶

野球部への風当たりが強くなったのには、いくつかの原因がある。長野県中学校長会議が応援合戦による南北信の対立から全国中等学校野球大会予選への参加を禁止するなど、「上」からの圧力も無視できないところであるが¹⁷、成績不振も重要な要因であるだろう。先述の中村が指摘しているとおり、当時の野球界は中等学校の全国大会がメディア・イベント化することによって、野球部OB会や後援会を通じての資金援助、進学・就職のルートが拡大した¹⁸。その流れを十全に利用して勢力を伸ばしていたのは実業学校であり、官公立中学校は次第に勝てなくなっていったという経緯がある。諏訪中学校でも、1919(大正8)年以降野球部は不振にあえいでいた¹⁹。「一校の士気を代表せる選手諸君」が誇りうる成績を上げられないという状況も、当時の批判の背景として挙げられる。

……校風の表現幾多あり就中学業及運動なり。

学業たるや喋々するを要せず。

嗚呼諷中運動の黄金時代は過ぎ去りしか、学校が眠りてはおらざるや校風の沈滞、自治の下に学ぶ諷中になぜに不屈不撓の点無きや県下連合マツチに牛耳を執りし諷中今何故に運動にしばらく声をひそめたるや。

校風の支配する処大なりと云へども吾等は大いに考へ復活の道を講ず可きなり。校風よくてこそ運動さかへ運動栄へてこそ校風は発展するなり。

……学校内の運動を余りに選手にのみまかせ過ぎたる感あり。

……選手として立つには必ず幾多犠牲あり悲劇の

演ぜらるや多し然れども一度七百の健児を代表して立たんか其の人には名誉に伴ふ責任あり。応援に対して不真面目なる練習は、到底望む可きにあらず。運動に対する人格、吾々は唯技術のみに満足す可らず、人格の修養に運動を用ふ可きなり。然して又必要なる事なり、実に運動は一校を代表す可きものにて、もしも選手にして不善の点あらんか、学校の名誉に関すればなり。スポーツの精神や甚だ尊ぶ可きにして、唯に試合の時のみならず、運動たるや和合の基なり。故に選手にして校名をけがすが如き輩あらんか大いに淘汰す可し。尊き運動の精神を破壊する害虫とも云ふ可し。²⁰

「校風」の表現として運動や学業が挙げられる。特に選手は「健児」を代表して運動する以上は「名誉に伴ふ責任」を担う。「校風」と運動との関連に限れば、学内での運動全般が盛んになれば「校風」は盛り上がるものである。「選手」は学校の代表者であり名誉にかかわるが、「校風」は全生徒が運動をすることによって盛り上がる、というように、名誉と校風とは区別して考えることができるであろう。

また、学校の名誉は、「諏訪」という土地によるところも大きい²¹。諏訪を代表する中学校の代表者である選手は、学校の名誉や伝統にとって非常な重責を負っていたといえるだろう。運動競技による好成績が他校に向けてのアピールであるこの時期、運動部の選手にとっては勝利こそが何はさておき獲得しなければならないものであった。そして選手以外の全校生徒にとってみれば、誇るべき学校の名誉は運動競技会で特に強く意識されるため²²、選手を応援し、援助する必要があった。と同時に、選手に運動の機会を優先的に回すことで、選手に比べてそれ以外の生徒は運動ができていないという批判も受けることとなった。先述の明治期と同様に、大正期においても健康に生活するための運動の役割という視点は存在する。第23号（大正13年3月）では、大正9年までの卒業生の進路を独自に調べた論説が掲載されている²³。「諏中出身者に死亡の多きはどうか」と述べたうえで、「中学時代の比較的閑な時に、まづと健康な体軀を造つておく必要がある」²⁴としている。

以上の箇所から、この段階ではまだ具体的な改革は求められていないとはいえ、「運動部一般化」以前の選手制度への行き詰まりとそれを打破するための「一般化」の需要の一端をうかがい知ることができる。こ

れ以降の「一般化」運動では、選手制度の行き詰まりの打破がどのように登場したのか。以下では、その具体的な展開を明らかにしたい。

4. 「運動部一般化」の経緯

野球部への風当たりが明らかに強くなって数年後、学生スポーツをめぐる大きな金の動きや選手の争奪戦などが問題化し、マス・メディアや学生からもスポーツ浄化の動きが起こった。大学や高等学校の校友会が選手制度の廃止とスポーツの大衆化を目標とした運動部改革運動を開始した²⁵。直接の影響関係は不明であるが、そうした時代の中で諏訪中学校でも「運動部一般化」運動が起こった。そのはしりとして、「校風挽回を」²⁶と題する論説が『校友会誌』上に掲載された。

……根本から校風を充実させるには、身体を強壮にする、即ち運動を盛にするに依る事が積極的に行く道でせう。或は云ふかもしれない『運動を盛にするは古いやり方、で且つ又実現するに要する費用に乏しい。』と。勿論費用は乏しいでせう。然し運動部選手等を遠征させたり、其他選手に要する費用を一般的にすれば、そしてそうする様に以後心掛ければ、校友会員全部がたのしく運動する器具は得られる事と確信します。現今の状態では、まだ選手にだけ学友会費を供給するといふ弊に陥つて居るのには明白です。『選手は僕等校友会員七百を代表して居るから、僕らが出来ただけ尽してやるのが当然ではないと思ふのか。又各学校と対応するには選手を、いやが上にも強くしないと体面にかゝはる』と言はれるかも知れませんが、選手は店の看板にたとへれば、店で販売する品物は粗末なものばかりで看板の大きさをのみ競つて我が事終れりとする店は決して永く信用を得られません。販売する品物が美事なものでありさへすれば、看板は粗末でも良いし、或は全然無くても、商業が途絶えるものではありません。僕は看板が無くても声価が称道されて繁昌する様な信用ある実力ある店を良いと考へます。それ故、まづ選手を廃しませう、対校試合及び是に類似する看板競ひはやめませう。選手を廃して平等の、今迄より高い地位を与へてあげよう。……²⁷

第23号（大正13年3月）から、「選手制度」廃止を訴える論説が登場する。第24号（大正14年2月）にも

「選手は自己の学業を放擲して迄も野球なり徒歩なりに勉め其の他の生徒は代りに選手を出したる如く考へて、手を運動に染むる事が無かつたならば、此れでも運動盛んなりと云い得る歟」²⁸、第25号（大正15年2月）に「真の意味に於ける運動と、選手制度とが両立しないと云ふ事は論を待たぬ事であらう」²⁹、「選手制度の始められた頃に於ても盛に論議されている」³⁰などの意見が出され、「選手制度」が批判されることになる。そして第26号（昭和2年2月）の発行された年度に、「選手制度の改革」³¹が「運動部改革」の名の下に実行される

……各部の運動費なる者も考慮しなくてはならぬ。一般の生徒から取上げた金、それが仮令学校代表の選手とは言へ、小人数の者の為に、学友会費の大部分が消費され、その反面一般の者には殆んどその恩恵がないとしたならばそれは当然改革を要する。
……選手制度それ自体に於て内在的欠陥なく、選手と一般の人々との間の矛盾と、不合理とが取り去られたならば、その方法は敢て問ふ所ではない……³²

第26号が発行された年の第五学年は、当時1924（大正13）年度のみ学校に在籍した東京帝国大学在学中の教員の影響を受けた生徒の多い学年であった。この教員は社会主義思想に傾倒し、後に共産党に入党している³³。先に示した野球界の動向とも相まって、この「運動部一般化」運動が起こったと考えられる。しかし、この「極端な改革は実行され難いもの」³⁴として、「野球部選手制度撤廃運動部解放」³⁵に落ち着いた。「運動部解放」とは、「選手丈の競技会に見えた各部定期会も出来る限り一般化」³⁶し、「野球部選手のみならずその他の各部選手も徐々に廃止せられむ事を希望する」³⁷に止まったことである。柔道部や剣道部、端艇部の選手は据え置きされ、庭球部などは徐々に選手を廃止することになった。この「一般化」により、全生徒は「必ず何かの部に入れと規定されて」³⁸、「出欠簿」³⁹をつけるようになった。これにより、運動への参加が出欠という形で全生徒にとって均一に可視化された。同時に、運動に対する生徒の内面といったものが出欠にすり替えられ、内面への言及が可能になったといえる。

財政余り豊かならぬのに余りにも高価なる選手制

を存続する必要何処に在るか？選手を排せ！一般化せ！

ではその弊害とは何？即ち

一、諏訪中学校の学友会としては余り選手制は負担が過重なる事。

一、選手は学校の為に一身を犠牲に供す事の他より見て余りにも同情に値する事。それ程までして学校の所謂意気所謂名声を上げる必要は全然無い事。強いて名声を上げやうとするならばもつと犠牲の少ない方法で出来る。

一、近来の我校の風潮は漸く愛校心が薄いで学友会の事は幹部任せ選手任せで、成る可く学友会の事業は怠けやうとするのをこの選手制度廃止により幾分なりとも除去しやうとする為。

一、身体は相当強壯にして運動の必要なきものが選手となり、反つて幾多の実例に見るが如く身体をこわし、身体虚弱なる者は体育費として幾分の金額を出しながら強壯なる選手の運動振りを傍観して益々虚弱となり益々運動を嫌悪して来る、□□従つて運動は必要となつて来る。

この際断然選手制を廃してこの虚弱者を強制的に何等かの部に加入せしめて運動させることの学友会の任務成ること宛かも怠け学生を教師が強制的に勉強を強いるのその任務たる事と同理である。

一、然し選手中には学校の為学友会の為と云ふ美しい名の下にかくれて人の禪を使つて自己の戦闘欲を満足せしめてゐる人のなきにしもあらざる事。

一、学校の為てふ美しい辞を以て選手たる事を肯じない人をも敢えて選手としてその人の前途を誤らしむる実例のある事。

一、諏中に於ては天才がレコードを高めるよりも一般が相当運動を理解し、活用すれば可なる事。

かくの如き見地の下に同級会に於てその論陣を張つた。併し一度に各部選手を廃止するのは理想としては勿論立派だが余りに急激な変動である、校内の意気は火の消えた如くに消沈するであらう。然も重なる学友会の位置方針を軽々時の当事者はしいま、に變える事は将来に於ける大きな反動あるも予測し得るのでこの極端な改革は実行され難いものとなつた。⁴⁰

「一般化」以前は、学校の名誉は対外試合での選手の競技成績によって、「校風」は全生徒の運動によって規定されていた。対外的な名誉を誇示する選手を優先することで、他の生徒は、少なくとも選手と比べて運動の機会が少ないということになる。ここが批判の対象となり、この問題の是正のためという名目で、「運動部一般化」が実施された。

代表選手制によって生徒は選手に協力するだけで学校の名誉に関わることができた。それは同時に、選手以外の生徒の運動にとって悪影響を及ぼすという批判が生じる余地を残しており、改革として実行する学年の登場を待って全生徒を強制的に運動部に参加させるという形で一般化制度が開始した。改革の名分は、運動の機会均等と運動による校風の発揚である。「一般化」実施当時の運動と校風の関係は、「一般化」以前のものとほぼ同じであったといえるだろう。

5. 「運動部一般化」以降

前章では、「一般化」の展開を述べた。本章では、「一般化」の論理を承けて学友会が運営され、実施当時の生徒がいなくなった後も継続される「一般化」の意義が模索される状況に接近したい。

「一般化」によって、選手によって得られてきた学校の名誉に揺らぎが生じた。対外試合には代表者が出場し続けていたので、学校の名誉を獲得する機会がなくなったわけではないが、それは選手の責任ではなく直接に全生徒の責任のもとにおかれることになる。このとき、運動やスポーツによる名誉と校風、あるいは伝統は全生徒に平等に担わされることとなった。

A. 選手廃止後の競技会参加者

諏訪中学校は「運動部一般化」を進めたが、競技会に参加していないわけではない。参加者は一部の「選手」と、「特別部員」とされ、部員は「一般部員」と「特別部員」とに分けられていた⁴¹。特別部員は「名目上は一般部員の指導」⁴²とされていたが、柔道部や剣道部などでは「選手制度両立を許す意味から又選手を創りだすため、一般部員より特別に練習をさせんが為特に分つた部員で、即ち連合マッチまで持続する部員」⁴³として制定された。また、庭球部などは選手を廃止することなく、そのまま「選手」として競技会に参加している⁴⁴。

この「一般化」によって代表者としての競技参加者は、「選手ではないから参加できない人」を形式上前

提としなくなった。その代わりに、対校試合に出る者は「全員参加した上でいい競技成績を出せそうな代表者」という意味に変化した。その結果、より直接的に全「諏中生」の代表となり、「特別部員」など代表者の出す競技成績が直接「諏中生」に関係することとなった。

今年度の大敗因は何処にあるのか？此の敗因迄も一般化に託し、勝敗云々が諏中盛衰に関係なしと戦績如何に就いて何等顧みないならそれは、余りにも無責任の至りであらう。もしや選手にして生気が消滅して居るならば、それは学校の生気消滅を意味して居る事を忘れてはならない⁴⁵

若し敗戦でもすれば特別部員の責任であるかの如く思つてゐる。勿論特別部員は学校の代表として、名誉を双肩に担つて戦ふ時があるのであるが、その勝敗の責任はその部全部の責任であると思ふ。かうした観念の起らないのも特別部員みの練習と思つてゐるからに相違ない。若し一般が特別部員以上に強かつたならばその人を選抜して代表として参加させるであらう、否、させるべきだ⁴⁶

これらの文章は、競技会への参加と諏訪中学校の生徒が論理的には直接関係したことを端的に表している。それまで選手の責任であった勝敗が、すべての生徒に対して責任として平等に課せられていくのである。

B. 生徒に求められた「精神」と発露としての運動

「一般化」後から、『学友会誌』上で盛んに言及されるようになるものとして、「談論会」と「自治」「矯風会」がある。「談論会」とは、全校生徒が参加して議論し、あるいはなにか案件については決を採るための制度である。

この「自治」を実行するために求められることは、各人の「自覚」であった。「運動部一般化の回顧」⁴⁷と題された論説では、「運動部一般化」の一年を回顧して、「無自覚の我々に強制する運動部一般化だからうまくゆく訳がない。……要するに失敗であつた」⁴⁸と「自覚」のなさを難じている。同じく第27号（昭和3年2月）の論説には「我々は無責任すぎた、自覚しよう」⁴⁹、「矯風会を通して我が校の現状を歎く」⁵⁰という題名のものもみられる。この論説で言及されている

のは、「矯風会」である。これ以降も「先輩の言を聞け！真の諷中を知らんとすれば、その矯風会を見よと叫んでゐるのではないか。諷中主義、諷中精神に則つて行はれるのが矯風会であるのだ」⁵¹という言葉や「或る者は云ふ、諷中の矯風会は乱暴だ」⁵²、「時には殴る事もあるが、諷中の伝統校風を知るものは、それに対して乱暴と呼ぶことはできない」⁵³の言葉は、「矯風会」の行動を、「建校当初より、将に半世紀五千の先輩が築き上げ、多くの愛校の士が死守してきた、此の輝かしい校風」⁵⁴に則つてなされるがために、正当化する。「五千の先輩」を背負って、その「多くの愛校の士」と同じ共同体を担う以上は、「伝統校風」に反することは許されない。「伝統校風」にそぐわない者を矯めるのが「矯風会」である。

「伝統校風」によって実現された「一般化」、「一般化」によって各生徒の直接の代表者となる競技参加者、であるから競技参加者の競技成績の良否は代表者を選び出している母体、各「諷中生」の中に「伝統校風」がどの程度「自覚」されているか、「理解」できているかということにすり替えられる。

一個の人間にとつて個性が大切であるやうに、一個の学校にとつてもその学校独特の個性が大切である。独特な個性を失ふたものはもはや精神的に完全に亡びたものである。我が諷中の他に誇り得る独特のものは自治である。創設当時から一貫して諷中魂を形づくつて居る自治の精神である。……自治精神とは何か、それは吾々が自覚して自分を考へて、社会考へて、其処に生ずる吾々の責任義務を遂行して行く精神である。自治は吾々の自覚的行動のあらはれである。吾々が真正面から偽らざる諷中の姿を見つめた時、一種の寂寥の感を抱かないわけにはゆかない。現在の諷中に自治精神がどれ程行はれて居るか。自治の精神を知るべき学友会の事業は自治は単なる形式になつて居るではないか。出欠簿が学友会の事業を遂行する有力な武器である。現在の諷中の学友会はほんとうに八百の生徒のものではない。五年の一部分の幹部の学友会である。⁵⁵

その結果、成績が悪ければ「現在」の諷中生に「当時の意気」が失われているという批判が噴出する。また、「出欠簿」によって定量的に「自覚」の欠如が示されることになる。「伝統精神」を諷中生に徹底させ、「創立当時の精神」に立ち返らせる機関が「矯風会」

であった。

その結果、「一般化の趣旨」や「自治の精神」への「自覚」によって生徒の運動への参加も競技成績の向上も可能にならなければならなくなった。「校風」と運動と競技成績とが「自治の精神」によって接続されたのである。

「運動部一般化」は制度化されているために、実施した生徒が卒業した後もある種のマンネリをともなつて継続された。行き詰った一般化制度を開閉するため求められたのは、「運動部一般化」そのものを校風の権化として扱うことと、運動をより熱心に行うという「一般化」実施の精神を生徒の内面に求めることであった。

6. おわりに

諏訪中学校で学校文化形成に運動部が果たした役割を、校風に注目しながら説明してきた。その際に大きな転換点として着目したのが、「運動部一般化」である。「運動部一般化」以前の代表選手制度では、学校の名誉のために特定の生徒が選手として他校との対校競技に臨み、生徒は選手への協力という形でかわっていた。選手に対する批判も存在したが、選手が学校の代表として活動すること自体に対しては批判は起こっていなかった。その後、選手の活動自体を疑問視する声や、校風と関わる運動を選手以外の生徒が行っていないとする批判が噴出し、代表選手制度を打破することが求められた。代表選手制度への批判の高まりを承けて、野球部を中心に「運動部一般化」が実施された。野球は代表選手制度批判の典型とされ、野球部の改革が「運動部一般化」の第一段階として（そしてそれ以上の進展はほとんど進まない形で）実質的に扱われた。

「運動部一般化」実施当時は、「一般化」以前と同様に運動によって校風を発揚することがその目的とされていた。その後、「一般化」の期間が長くなるにつれ、「一般化」を実現した諏訪中学校の校風の発展が運動の目的となっていく。この段階で、校風が全生徒の内面で「自覚」されなければならないとして生徒に求められるようになったのである。生徒の運動部への参加によって校風が規定され、出席を細かく管理することで出席が校風の内面化の証として扱われ、校風は全生徒に目に見える形で要求されることになった。また、全生徒の中から競技会参加者を選出することは、「一般化」以前は特定の選手が担っていた学校の名誉を全

生徒の責任の下に置くことも意味する。このとき、学校の名誉のために全生徒が運動を積極的に行わなければならないという論理が成立することになった。全生徒が運動部活動によって校風を振作し、その結果として学校の名誉が得られる形になることで、学友会の運動部に参加することはより強い精神性を帯びることとなった。そして、その精神性はかつての選手だけでなくすべての生徒個人に対して求められることになったといえる。

最後に、残された課題について触れておこう。諏訪中学校では、「運動部一般化」という画期により競技会による学校の名誉は全生徒の運動部活動によって高揚する校風の結果であるとして生徒の運動部活動が精神性を帯びる様子が顕著に現れた。しかしながら、大正末期から昭和にかけて学校の名誉と校風が運動を介して一体化し、生徒に求められる現象は、諏訪中学校に特殊なことであったのかという点について検討する余地が存在する。諏訪中学校での「運動部一般化」のような現象は、他の中学校においても一般的であったのだろうか。あるいは、中等諸学校をめぐる政策や状況など、当時の同時代的な潮流の中で、こうした「一般化」のような現象はどのように位置づけられるのか。今後検討すべき非常に重要な課題である。

また、旧制中学校における運動部の変革を、今日的な意味でどのように評価するかという点でも不十分である。そのためには、戦後新制の学校制度の中で行われる部活動や総力戦体制下および戦時期の運動部活動、報国団活動などにも触れる必要があるであろう。この点についても、きわめて重要な今後の課題である。

(指導教員 小国喜弘准教授)

注

- 1 佐藤秀夫『教育の文化史2 学校の文化』阿吡社、2005、p. 1
- 2 同上、p. 1
- 3 同上、p. 2
- 4 同上、p. 2
- 5 中村哲也 2009 近代日本の中高等教育と学生野球の自治 博士学位論文、一橋大学
- 6 「学友会会則」『学友会誌』第1号 明治36年12月、p. 149
- 7 菊池久吉「所謂運動屋一名自讃運動家に檄す」『学友会誌』第2号 明治37年12月、pp. 8-9
- 8 雪窓生「運動会に就きての所感」『学友会誌』第2号 明治37年12月、pp. 78-79
- 9 齊藤利彦「競争と管理の学校史——明治後期中学校教育の展開——」東京大学出版会、1995、p. 29
- 10 同上、pp. 46-47
- 11 同上、p. 50
- 12 米田俊彦『近代日本中学校制度の確立—法制・教育機能・支持基盤の形成—』東京大学出版会、1992、pp. 103-108
- 13 同上、pp. 108-112
- 14 「雑報」(定期談論会)『学友会誌』第11号 明治45年2月、p. 103
- 15 五洲学人「吾等が野球に対する考」『学友会誌』第11号 明治45年2月、p. 4
- 16 「甲信野球大会に於ける野球部の奮戦」『学友会誌』第18号 大正8年2月、p. 90
- 17 長野県松本深志高等学校同窓会『長野県松本中学校 長野県松本深志高等学校九十年史』、1969、pp. 532-537
- 18 中村、前掲論文(2009)、pp. 76-103
- 19 長野県諏訪清陵高等学校同窓会・清陵八十年史刊行委員会『清陵八十年史』、1981、pp. 364-365
- 20 三年 濱洋治「校風に伴ふ運動」『学友会誌』第21号、大正11年3月、pp. 27-28
- 21 「余白録」『学友会誌』第17号、大正7年3月、p. 53。この「余白録」というコラムには、県下の中学校が集まる連合マッチの夜の記事がある。その内容は、次のようなものである。諏訪中学校の生徒が、その日徒歩競技にて大活躍をした他の中学校の生徒と湯で鉢合わせた。その時、諏訪中学校の生徒は足の速い人は皆諏訪地方の人だと考えて、その生徒に諏訪地方出身ではないかと尋ねたというものである。
- 22 他にも、前掲注21『学友会誌』第17号p. 28やp. 70の「余白録」では、他校の生徒に対して諏訪中学校が優れているというエピソードが紹介されている。
- 23 五年 濱洋治「先輩を考へてみて学友会員への希望」『学友会誌』第23号 大正13年3月、pp. 82-86
- 24 同上、p. 84
- 25 中村、前掲論文(2009)、pp. 113-115。社会科学についての思想がこの「運動部改革」運動に影響を与えていたのかもしれない。
- 26 五年二部 金原禎一「校風挽回を」『学友会誌』第23号 大正13年3月、pp. 17-18
- 27 同上、pp. 17-18
- 28 四年一部 宮坂正一「体育運動および競技に就いて」『学友会誌』第24号 大正14年2月、p. 39
- 29 五年 北澤壽久「諏中の現状を嘆く」『学友会誌』第25号 大正15年2月、p. 51
- 30 同上、p. 51
- 31 五年 三沢理三治「現代教育制度を横観して」『学友会誌』第26号 昭和2年2月、p. 18
- 32 同上、p. 18
- 33 前掲『清陵八十年史』、pp. 149-151
- 34 「学友会野球部選手廃止と文芸会科学会の設立」『学友会誌』第26号 昭和2年2月、pp. 274-277
- 35 同上、p. 277
- 36 同上、p. 277
- 37 同上、p. 277
- 38 同上、p. 276

- 39 同上, p. 276
- 40 「学友会野球部選手廃止と文芸会科学会の設立」『学友会誌』第26号 昭和2年2月, pp. 274-277。なお, 判読不能な文字は□と表記した。
- 41 「校内雑録」(「柔道部記事」)『学友会誌』第28号 昭和4年2月, p. 24
- 42 前掲『清陵八十年史』, p. 371
- 43 「校内雑録」(「柔道部記事」)『学友会誌』第28号 昭和4年2月, p. 25
- 44 「校内雑録」(「庭球部記事」)『学友会誌』第28号 昭和4年2月, pp. 80-83
- 45 五年 小平庄平「諏訪中学三拾年来の伝統精神を尊重し我校興隆に努力せよ。」『学友会誌』第29号 昭和5年2月, p. 4
- 46 五年 増井邦夫「諏訪中学校に於ける現在の運動」『学友会誌』第40号 昭和14年2月, p. 14
- 47 四年 笠原健「運動部一般化の回顧」『学友会誌』第27号 昭和3年2月, pp. 65-67
- 48 同上, p. 66
- 49 三年 藤森傳衛「我々は無責任すぎた, 自覚しよう」『学友会誌』第27号 昭和3年2月, pp. 68-70
- 50 五年 矢崎寅雄「矯風会を通して我が校の現状を歎く」『学友会誌』第27号 昭和3年2月, pp. 148-151
- 51 五年 横内久雄「諏中九百の健児に檄す」『学友会誌』第35号 昭和11年3月, p. 49
- 52 五年 小平庄平「諏訪中学三拾年来の伝統精神を尊重し我校興隆に努力せよ。」『学友会誌』第29号 昭和5年2月, p. 3
- 53 同上, p. 3
- 54 五年 矢島實「校風再認識の要なきか」『学友会誌』第36号 昭和12年3月, pp. 26-27
- 55 四年 篠原健吉「起て諏中八百の健児」『学友会誌』第27号 昭和3年2月, pp. 47-48

本研究の史料調査は, 科学研究費補助金・基盤研究(B)平成21~24年度(研究代表者: 斉藤利彦)「旧制中等諸学校の『校友会雑誌』にみる学校文化の諸相の研究と史料のデータベース化」(課題番号: 21330182)の一部である。なお, 本研究で使用了史料は長野県立諏訪清陵高等学校同窓会に所蔵されている。各校関係者の厚意により閲覧の許可をいただいた。ここに記して謝辞とする。